

## CWS 70周年 ララ物資 70年の歴史を追って シカゴからカナダへ

CWS Japanプログラムオフィサー(国内事業) 牧 由希子

### ララ物資とCWS Japan

米国に本部を置くCWSの歴史は、敗戦直後の日本へ贈られた救援活動のララ物資から始まりました。CWS日本委員会は1946年東京に事務所を開設し、1952年迄ララ物資の配給活動を実施。以降CWS日本委員会は国際キリスト教奉仕団と名称を変更し、1963年までCAC物資※による支援活動を継続しました。その流れから1958年に日本キリスト教奉仕団が創設され、障がい者支援活動を現在も推進しています。2011年には東日本大震災に対する緊急支援を行うため、CWSとして再び東京に事務所を開き、CWS Japanが設立されました。(CWS Japan団体案内より)

※CAC物資とは、ララ物資主要メンバーであったCWS・AFSC (American Friends Service Committee)・CRS (Catholic Relief Service)の頭文字からとった名称。

### 戦後71年目の今年 70周年を迎える「CWS」と「ララ救援活動」

2016年の年明けと同時にCWS本部CEO(最高経営責任者)から、今年はCWS設立70周年であるというメッセージのメールが届きました。

CWS 70周年、それは敗戦後、飢餓と貧困で苦しむ多くの日本人を救い、日本の学校給食を開始するきっかけとなった「ララ救援活動」の70周年でもあります。

私がCWS Japanに関わることを決めたのも、実はCWSが「ララ物資」の支援団体であったことが理由でした。ララ物資が、ケア物資(1948年～1955年迄、米国のCAREという民間団体から日本へ贈られた救援物資)と並び、北米から日本へ贈られた救援物資である事を、私はこれまで国際協力や人道支援に関わってきた者として知っていました。



### 日本でのララ物資70周年記念事業

そして日本でも、ララの記念日にあたる11月30日(1946年輸送第一便「ハワード・スタンプペリー号」横浜港到着の日)、日本基督教団・YMCA・ウェスレー財団・日本キリスト教奉仕団・CWS Japanが、共同でララ物資70周年記念事業を開催する事になりました。CWS本部のCEO ジョン・L・マッカーレー牧師の来日も予定され、私は開催に向けCWS Japanの担当者として、イベントの企画実施に携わる事となりました。





日本でのララ物資配布

## 「ララ物資」と米国の活動参加団体

ララは、Licensed Agencies for Relief in Asia(アジア救援公認団体)の頭文字をとってLARAという略称で知られていました。1946年からララ終了時の1952年までに贈られた救援物資総量は1万6700余トン、当時の日本の円で400億円程度であると言われています。そのララ救援活動に最終的に参加した団体は計13団体。主要な参加団体は米国のキリスト教系奉仕団体であり、日本でも知られているYMCA、YWCA、ガールスカウトと並び、CWSはその中でもララ救援物資の半分相当量を出荷していました。なぜなら、CWSは複数のキリスト教系組織によって発足した団体であり、その前身の1団体であったChurch Committee for Relief in Asia (CCRA:アジア救済教会委員会)などは、50近い宗教団体が加盟する超宗(教)派の組織だった事で、全米の加盟教会から多くの献金を集めることができたためです。

## CWS の発足

CWSは、ララが組織化された翌月1946年5月に、ララ発足に関わった前記のCCRAを吸収し、Federal Council of Churches(教会連邦協議会)、Foreign Missions Conference of North America(北米海外宣教協議会)、American Committee of the World Council of Churches(世界教会協議会・米国委員会)など世界的救済活動を行っていた3団体によって設立されました。名称をChurch World Service(教会世界奉仕団 CWS)とし、第二次大戦の被災国救済と再建活動を調整することを目的として多数のプロテスタント教会を傘下に収め設立されたので、ララ救援活動において多大な勢力を持っていました。

## ララがなかったら、CWSは発足しなかったのではないだろうか・・・



CWS CEOのジョン・マッカーレー牧師  
Photo: Jose Carlier

残念ながら70年という時を経て、今日のCWS米国本部関係者の間で、このララのことを知る者は生存していません。また当時の歴史史料が保存されていないことから、日本事務所以外ではあまり知られていませんでした。今回最初に尋ねたシカゴ会議でのプレゼンテーションの中で、「ララがなかったらCWSは発足しなかったのではないだろうか？」と問うたところ、CWS CEOのJohnは「まさかね」と、首を横にふって否定していました。

しかし様々な史料を読み解く中で、第二次大戦中ララの前身となる委員会が発足、終戦後ララが組織化、それらの動きの中でCWSが創設されたというこの流れは偶然ではなく必然だった、と私には考えられます。

ただ、CWS発足当初から始まったCROP( Christian Rural Overseas Program 終戦後米国から海外に食糧を送り出した支援活動。詳細後述)と、ララとの関係性の有無について、証明する史料は未だ見つかっていません。

私は、是非、11月30日の日本イベントで、世界に向けて、このララの活動の流れを明らかにし、ララの意義と今後の人道支援について、様々な人に関心を持ってもらいたいと思っていたのです。

## まずシカゴへ

私は、CWSでは国内事業を担当していることから、出張といえば主に国内が中心でしたが、この7月、CWS本部が主催するCROP US Summer Gatheringというスタッフミーティングに参加する事になりました。

このシカゴのミーティングの後、トロントに足を延ばし、戦後の日本における救援活動の基盤を築き、最も迅速に正確な情報を得て、献身的に動いた数多くの北米宣教師達の働きを知るジョージ・E・バット博士の足跡を訪ねたいと考えたのです。



シカゴのダウンタウンを流れるシカゴ川  
写真: 牧 由希子

## CROPミーティング参加

CROPミーティング、それは一体どんなミーティングなのだろう？初めての事に、ちょっと重い気持ちもいただきながら、シカゴに向かいました。

それは一言でいうと「ファンドレイザーのためのミーティング」でした。アメリカ各地でCWSのためにファンドレイジング活動をしている30名近くのスタッフがシカゴに会しました。ひたすら3日間、朝から夕方まで、数々の報告、プレゼンテーション、ディスカッション、会議が組まれる、そんな過密スケジュールの中、ペアを組んで近くの公園で通行人インタビューという面白い課題にも取り組みました。



CROP参加者(CWS本部スタッフ)と  
通行人インタビューのペアワーク

## CROPに今も息づく人道支援の歴史

CROPは、CWS設立当初(1946～)に、第二次大戦の被災者や難民の飢餓救援のために、Friendship Trainという名の汽車が、米国各地の農家が供出する穀物を集めて回り、海外に食糧を送り出したことから始まった「ファンドレイジング運動」です。もちろん今日では食糧ではなく募金活動になりましたが。毎年、春・秋にはCROP Hunger Walkという飢餓撲滅チャリティウォークラリーが米国各地で開催されます。各地に配置されているCWSスタッフは、地元のボランティアコーディネーターとともに数十名のボランティアを束ねながら、イベントの企画運営を行っています。このウォーク以外にも年間を通して担当地区内の教会や学校等でCWSが行っている海外事業について、プレゼンテーションやイベントも企画しており、なかにはこれらの活動により年間10万ドル近くの資金を集めてしまう地区もあるそうです。



CROPミーティング風景

## Japanからララ物資70周年記念事業と東日本大震災に伴う福島原発の課題について報告

CROP US Summer Gatheringは、今回が初めての開催ということで、これまでの活動成果のふり振り返り・評価、これから1年間の活動目標・計画、そして広報活動に役立つスキルやアイデアについて考えるというのがプログラムの主要な流れとなっていました。

その中でファンドレイジングスタッフが地域で語るためのストーリー提供ともなる、海外事業の現況報告セッションが初日に行われ、4地域(アジア・南米・ヨーロッパ・中東)の私達4名が、4グループに対し4回連続でプレゼンテーションを行いました。

国内事業を担当している私は、①東日本大震災復興事業の一つである福島県の放射線量測定プロジェクト、②昨年取り組んだCWS Japanのブランディング戦略、③この11月に開催を予定しているCWS・ララ物資70周年記念事業の計画、の3点について報告しました。

各地域から途上国における開発や難民支援の課題が数々発表されましたが、日本からは日々放射線被ばくの不安に向き合う福島の人々の現実があることを報告しました。先進国と呼ばれる日本で、このような現実があるという事を知る良い機会となったようです。特に、日本政府が追加除染を進めるよりはむしろ、立ち入り制限区域の解除を進め、住民の帰還を促そうとする姿勢に、参加者は驚いていました。また、自分が居住する州内に原発があるかどうか分からない参加者もいて、慌てて調べ始める人もいました。既に原発があることを知る人は、日本から持参した、CWS Japanが参加して制作した福島ブックレット「福島10の教訓(英語版)」に関心を持ってくださいましたので、1冊託すことにしました。



「福島10の教訓(日本語版)」

## CEOの発言に心を新たに、カナダへ

私のプレゼンテーションには、放射線量測定に関する様々な質問が出ましたが、CWS Global代表CEOは、「それで、CROPチームにできることは何だ？」と発言され、ちょっと試されたような気がしました。CWS Japanでは、このプロジェクトを持続可能にするための課題として、コストの点をプレゼンテーションでは挙げていたので、測定活動を継続するためにかかる最低限の費用と、原発を持つ国民にとって、決して他人事ではないリスクについて、皆に伝えて欲しいと話しました。

現在CWS Japanでは、職員数等もあり、米国のようなイベントや、地域での講演会などは行ってはいないのですが、今回CROPに参加し、今後のファンドレイジングへの取り組みに、とても刺激を受けました。今後CWS Japanでも、教会やミッション系教育機関で活動紹介等のイベントを企画しようなど今後の計画も膨らみました。

また、一つのファンドレイジングの機会として、11月に計画している、ララ70周年記念事業があります。より多くの人がCWS Japanに関心を持ってくださるような、ララ物資の歴史ストーリーを紹介したいと、気持ちを新たにシカゴを後にカナダに向かいました。



カナダ トロント市庁舎前 写真:牧 由希子

## トロントではバット博士の資料に導かれる

カナダのトロントでは、ジョージ・E・バット博士の残した資料が、CWSとララ70周年のつながり、多くの関係(者)団体とのつながりを手繰り寄せ、発見させてくれることになりました。

バット博士は、戦前、カナダ合同教会から日本に派遣された宣教師で、山梨や東京東部の下町で数多くの社会事業を手掛けておられました。博士の主な働きについては、『愛 わがプレリュード』(1994年:新堀邦司著)の中で詳細に記述されています。私はこの本を読み、バット博士が日本側でララ中央委員会の実行委員長をCWS日本代表として務められたことを知りました。

「ララの参加団体にも入っていないカナダ合同教会の宣教師であるバット博士がなぜ米国の組織であるCWSの日本代表に任命されララの中心人物となったか？」今日の国内外関係者は皆ロクに「それはバット先生が日本語を話し、戦前に日本で活動していたからだよ」と言いました。もちろん、その答えは間違っているとは思いませんでしたが、何か腑に落ちないものを感じ、その疑問は、CWSの設立にも関連するのではないかという気がしていましたが、その答えは日本でもアメリカでも見つけることができないでいました。そこで、今回、トロントにあるカナダ合同教会本部と同教会公文書館を訪ねることにしたのです。

## 日本と繋がり深いカナダ合同教会で

カナダ合同教会(UCC: United Church of Canada)は、19世紀にまで遡り、その前身であるカナダ・メソジスト教会の頃から日本に向けて多くの宣教師を派遣してきました。東洋英和女学院を創設したのもこの教会であり、昔から日本とのつながりが非常に深い教派でした。そして、CWS Japanも先の東日本大震災や熊本地震で同教会から多大なご支援をいただきました。それらのお礼や事業の進捗報告も兼ねて、トロントにある本部を訪ね、アジア地区担当の patt・エルソンさんをはじめとするチームの皆さんと面会させていただきました。

実は、CWS本部関係者同様、UCC本部スタッフも、patt博士の存在やUCCがララに関わっていた史実について、私から問い合わせがあるまで知らなかったようです。開ロ一番にその事について聞かれました。

UCC本部スタッフが知らないと言う事実は、支援した北米側の教会が、あれ程の大事業に多大な貢献をしていながらも、その実績を後世に敢えて語り伝えようともせず、当時の記録は公文書館に静かに収蔵されていただけ、ということの意味しています。また同時に支援を受けていた日本側でも、ララを支えていたのが北米の数多くの教会であり、クリスチャンの人々であることも、これまであまり語ることはありませんでした。そこにララ精神である公平・公正さ、ララに尽くした支援者側の人たちの、日本人に対する様々な配慮や謙虚な姿勢が見られます。そんな事を語り合い、pattさんと同僚の皆さんから歓迎を受けました。

そして、CWS Japanが行っている現在の優先課題や取り組み、ララ70周年記念事業について、大変関心を持たれ、また我々の動きについて感謝を受けました。11月30日の、ララ物資70周年記念事業「ララ記念フォーラム」に、日本在住の引退した元UCCの宣教師の方が出席されるよう、手配して下さる事になりました。



UCC本部でアジア地域チームと。(pattさんは左から2番目)

## カナダ合同教会公文書館で

日本から予約していた通り、翌週月曜日に公文書館を訪ねました。UCCの公文書館は素晴らしく整理・管理が行き届いており、対応して下さった司書の方のきめ細やかな対応に感動させられました。自分達の歴史を組織の重要な財産として認識し、適切に管理し、外部者にも公開するという姿勢に、組織の意識と質の高さを感じさせられました。

先ず、日本から公文書館のサイトを通してリクエストしていた、数十枚のララとpatt博士関連の写真を実際に出していただき、1枚1枚手にとって確認させていただきました。中には、マッカーサー夫人や昭和天皇皇后とpatt博士が写っている写真等もあり、おそらく日本国内には所蔵されていないだろうと思われる70年前に撮影された写真一枚一枚に、歴史的価値の重さを感じました。写真は公文書館側でデジタル化し、後日メールで日本に送って下さるという事です。選び抜いて最終的に10枚の写真を発注することにしました。

## カナダ合同教会公文書館で見つけた答え

私の疑問の答えを探するため、1日、朝から閉館まで公文書館で過ごし、1945-1946年に書かれた委員会議事録、手紙、報告書、伝記等々の発掘調査を進めました。最後に、当たりをつけていた、前述したForeign Missions Conference of North America(北米海外宣教協議会)の議事録と手紙の中に、その答えを見つけることができました。

バット博士は開戦後も他の宣教師が次々と引き揚げていく中で、1942年まで日本に留まり、周囲からの説得に応じ、カナダへ帰国されました。しかしながら帰国後も終戦後日本で行う救援活動のための準備を進め、終戦した1945年12月には同協会日本支援準備委員会によって日本への再赴任が正式に承認されました。派遣当時、博士の身分は、所属が先述のアジア救済教会委員会(CCRA)であり、北米海外宣教協議会からカナダを代表し宣教師団派遣第一陣として日本に再赴任したのです。

実は、この北米海外宣教協議会はCWS創設時の構成団体の一つであり、CCRAはCWSが設立後、吸収合併した団体です。UCCはこの北米海外宣教協議会に1930年代から加盟していました。このような経緯からUCCとCWSはこれらのCWSの前身団体を通してつながっていたということなのです。バット博士はララとCWS発足を待たずして、既に1946年3月に北米海外宣教協議会から任命を受け、日本に向けて出発していました。そして、1946年5月にCWSが組織化されてからは、所属がCWSに移り、給与や生活費もCWSから支払われるようになりました。それに対するバット博士の感謝を表す手紙も見つかりました。

## バット博士を支えたハワードパーク教会を訪ねて

また週末をトロントで過ごしていたので、日曜日にはバット博士を宣教活動に送り出していたハワードパーク教会を見ておきたいと思い、訪問しました。この教会は130年以上の歴史を持ち、バット博士の日本での働きを長年にわたって支えてきたそうです。市内中心部から路面電車を使って30分ほど、閑静な住宅街を抜け、素敵な小さいカフェや商店が立ち並ぶ大通りに出たところに、その堂々としたレンガ造りの教会が立っていました。

ウェブサイトによれば夕方にも礼拝があり、午前のよりもっと緩やかな様子だったので、夕礼拝に出席してみようと思ったのですが、中に入るとシンとしていて、とても今から何かが始まるような雰囲気ではありませんでした。声がする地下に下りていくと、キッチンがあり、スタッフ数人が料理をしていました。声をかけてみると「あ〜、ボランティアの人ね」と、配膳の手伝いにきたボランティアだと勘違いされました。夕礼拝に来たこと、また牧師に面会したい旨を説明したところ、夏の間は夕方のお礼拝は行っていないというお話でした。この教会では、毎週日曜日の夕方、無料で夕食を提供しているそうです。食べに来られる方々は、主にホームレスや生活困窮者だという事でした。配膳の手伝いをすれば牧師に会えると言われたので、手伝うことにしました。



CWS Japan団体案内を手渡し、アン牧師と。



荘厳なハワードパーク教会内部

## 牧師のアンさんに会い、カナダ人の精神を知る

しばらくダイニングホールで待ってから、またキッチンの方を覗いてみると、その古い伝統ある教会からは、ちょっと似つかわしくないラフな格好をした牧師のアンさんが、焼きあがったケーキを切り分けていました。私は簡単に自己紹介し、バット博士の話をし始めると、「あ～、その人の話は以前本で読んだことがあるわ。」と言われましたが、それ以上の情報は得られませんでした。

礼拝堂に案内されると、その高い天井と荘厳な広がりによって圧倒されました。壁には歴史を感じさせるステンドグラスと寄贈したであろう方々の名前や年号が記されていて、やはり古くは19世紀のものからありました。

残念ながらハワードパーク教会でバット博士の痕跡は見つけられませんでした。資料によれば、カナダの宣教師たちには、共通した特色があるようで、それは寛容で民主的で、かつ進歩的であること。彼らは社会正義に対する関心が高く、人権擁護や社会的な弱者保護に基づいた社会事業を興してきたそうです。カナダ政府は昨年シリア難民大量流出に対して、とても積極的に難民受け入れの姿勢を見せていました。この寛容で進歩的な精神が、カナダ人の心の奥底に深く根付いているような気がしてなりません。

今日、どこの国でも若者の教会離れが深刻な中で、ハワードパーク教会での高齢者の割合は、ほんの2割程度だと聞いて驚きました。そのせいか、同教会では年間を通して、数々のイベントや社会奉仕活動を行うことで、地域に開けた教会として親しまれています。ホームレスの方々への食事提供もその活動の一つで、教会外からボランティアに訪れる若者を何人も見かけました。また彼らは特にクリスチャンという訳でもないそうです。

帰りの車の中で、アンさんのお話を伺い、この教会が、どんな立場(性別、人種、信条、文化的違い、能力、宗教、また性的嗜好にかかわらず)の人も受け入れ、オープンでリベラルな社会に奉仕する精神は、海外に赴き社会事業に貢献する宣教師たちを後押ししてきたあの時代から、脈々と受け継がれてきている事を感じさせられました。そして、その精神に誇りを持ち、熱く語るアン牧師の姿に共感をおぼえました。

## 実り多かった今回の出張

今回の出張でChurch World Serviceが、どのような時代の流れやつながりの中で、設立され歩んできたのかを垣間見ることができました。この70年という組織が歩んできた歴史を、重要な資産だと認識し、今後の活動に活かしていけたらと考えています。

## 成果を11月30日に！

今年の11/30(水)の午後、ララ物資の第1便が横浜港に到着した日、その70周年を記念して「ララ70周年記念フォーラム」を、早稲田奉仕園内スコットホールにて開催します。地下のスコットホールギャラリーで、私の探究したララ物資70年の歴史やバット博士の活動に関する写真も展示する予定です。開催時間など詳細についてはまたニュースレターでお知らせいたします。是非、今からお出かけのご予定にお入れ下さい！



ハワードパーク教会 駐車場からみた外観